

新編和文庫

下之二
四十六

庫文官政			
		七	和
		六	書
		一	門
五	四	九	類
四	冊	函	號

庫文閣内			
		七	和
		六	書
		一	類
二	四	四	類
〇	冊	函	號

内閣文庫			
番號	和	7614	
冊數	54 (44)		
函號	200	4	



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



於多岐和崎其本春清方...

相序

限

限

限

限

限

限

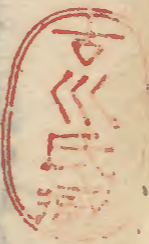
限

次

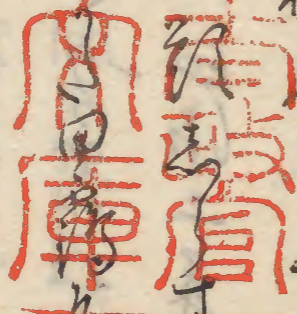


教部省
文庫印

新子孫和譜集卷第十



雜音上



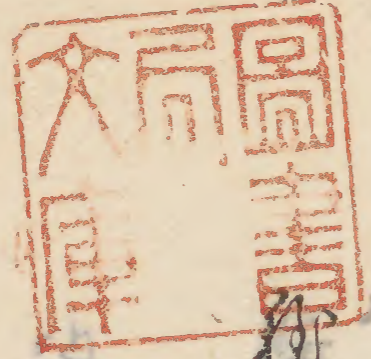
久納言師頼

新子孫和譜集卷第十
久納言師頼
寛治百有奇年冬十月時鴻鷹

山階入道前太右

白か乃病れも衣ええぬは田養のつよぬれけ
系集集の初よりしてよきせけりまらり奇
の中より山階入道前太右

伏見院御製



高祖又亦能行らの約故に事付侍ら
あふつて是れ其のしありの世に侍者の社
は海にてもゆくらつてよか乃に柱よつて
ゆくら
な系亦侍
まうらうしものいれ侍者のうらまはしの
百首あまらう一時浦松
前中池云有光
清見の雲しぬも不安のねし海へのせ
名所垂しつてまこと

海正尹那有親と

く世に流りたる年も大伴のころ乃に流松から流ら
濱を芦しつて海に流ら

皇太子文を更俊成

ともいれ流る川の流の流れ流の流るるくむわ
亭子院石山よまうてをせ流りむら目を
の國のつぎ打お流よれもうむつらむら
よりむらむらふささんせせ流ら
ちよあつ
大伴思

何ら流らむら流を流らむら流らむら
文保百首あまらう一時

くら時おまの心と 民部心おぬ

のこたも成よけつおま代よあぬいそまどと

歌一しらす

前大納言実家

山のこもりとめをきかひつよへつらまど何とん

貞和百首奇めされし時

入道三品親王実家

今もさと秋立松の朝露世よあけしと神うそ

子曰よあけしとけり日神祇伯郎仲り

よな一とひつらとら思のりくつら

待賢門院御門

いさせあひまの松のこもておまれとあまの

歌一

神祇伯郎仲

初らともおまの松の移るそいそまをまてん

よ陽人乃らとらとゆら

鴨那祇

中しはひひても又別はり六十のまけらひまの形

歌一しらす

前大納言実家

いせりくお物らとまそとておまれ社の堂のあ

赤元百首奇めされたりつそ

後守多院御家

時一のまの若くもあつたきよとてはくくくくく

寶治二年後醍醐院より言さるる事なりけり

時よ草とて 花山院前内官

冬指のまのひまうりりひかりまの光のゆかり

歌一しらす 比下實性

まぬらわりの若く清おんわらもまをまのま

後醍醐院西の典約

あのみまの月もひらりそまの乃くくくく

前大僧正慈順

園らるる若くは梅の花乃くまの若くはくくく

あまの宗素

きり重れ酒ねもあつた白ひそわらひまの梅の

歌元百首奇なをさる時柳

前中納言雅春

けあつた若くは梅の花とてまのつらう宿をあら

歌一しらす 源重之女

まのまのまの宿のひまをけりまのまの神をわさ

弘安六年三月懸君除月中の日のぬら

かりゆらりふ前大納言をせりまのまのま

糸織とのうみりつそよ

兼天御云乃氏

いとゆらけ乃御本このぬよとれぬめくしれまことと

ぬし 照念院今乃実白兼乃政下

こわらぬたのことうけよまぬよれぬめくしれまことと

春日社よりしてなせり百とておれ申す

乃道御長

新らそよせり乃のたれまぬよゆりおれ乃の月め

又保百首弁なけりとい

氏子乃為敷

むらり乃野人のせり乃乃たぬをぬくさうま

題とす

兼山院御製

横をて一燈の素れまのせり乃野人のさうま

貞和二年百首弁めき終り時

兼中御言雅考

兼神よ志の源れまらさうまのせり乃月のみく

平宗宣御長もめゆり乃吉社とす

そふれ申す

今い乃ふり乃のせり乃の源乃志の源乃志の源

おゆり月夜を 中務の宗考親王

ふれ乃乃乃のせり乃の源乃志の源乃志の源

しげらるるわさぎの花とよもはるるあめらしきつらふらふら
のうじもつらふらふらつら年のきりぬるし
まてた乃花と記ゆらふらつら

藤原宗秀

かゝるる花とよもはるるあめらしきつらふらふら
記ゆらふらつら

祥子内親王

ゆらふら花とよもはるるあめらしきつらふらふら
平惟貞公

じらふら花とよもはるるあめらしきつらふらふら
藤原宗信

花あめらしきつらふらふらつら
竹律中別荘

あめらしきつらふらふらつら
藤原宗信

花あめらしきつらふらふらつら
藤原宗信

建武二年内裏子首弁より記をたてし
てたてしつらふらつら時春種地とらふらつら

藤原宗信

久しにや升とよもはるるあめらしきつらふらふら

花のうらみ

うらみうらみうらみの花のうらみ

前僧正慈勝

世のうらみうらみうらみの花のうらみ

前大僧正のうらみ

うらみうらみうらみ

以下定為

凡そ世のうらみの花のうらみ

西首文よむせぬうらみ

土師門院御製

うらみの花のうらみ

まのうらみ

まのうらみの花のうらみ

又和四年春のうらみ

花のうらみ

まのうらみ

うらみ

花のうらみ

うらみの花のうらみ

花のうらみ

朽のうら老木花とらにを我々のまのよれ

後定丸院家お興侍

うはち我儚うまのう花よをまやのうくたん

道因法師

まてふく老木のむよもくんよせん年の消うまのこ

老のゆ花とらんくうま

三条入道前大臣右大臣

あまもうもつに梅花亭の老れくたるまの

前大僧正良信邸とさうあてを命のゆま

ゆま 前僧正實福

まよ花よんはうつまてまくはわら身はるけ

歌一うす 赤深朱の

花よんあそもくまのまの命よまもせてん

二品は親王えん物

うめえぬよりいと花はくくまもくも張まの山風

夢家圓師

しほりて花いさけはかたのち一秋あまのうまの

中勢大捕よそ空衣條時多奈の舞人^{山風}

うそゆらり時かさうの花と人の行よつらりて

ほと位乃絶

入おの種は月のまうくきとまうくわと花やあは

うーおしふあわ花のこまきと花のこまきと

源宗氏

散花の法はやまのゆりあまの別うけん

前右衛門守

消えの花は常少し朝とあまやまのゆりのまの

元弘三年立命 関人屏風は苗代

前中納言惟健

わふ田はゆりあまのゆりあまのゆりあまの

けきし心と

系後敷有

まはくくくくくくくくくくくくくくくくく

弘長元年百首 今もあつた三月書

前大納言みゑ

力のよきとあまのゆりあまのゆりあまの

平高宗

おあふゆりあまのゆりあまのゆりあまの

前左衛門守

しんがしんがしんがしんがしんがしんがしんが

惟宗時後新后

郭云の... 明... 郭云の...

三音遠漸初長

待... 郭云の...

有原行初

... 郭云の...

法眼結喜

... 郭云の...

前大納之云薩

... 郭云の...

法三位初平

郭云の... 郭云の...

新日吉社... 郭云の...

夏奥... 郭云の...

... 郭云の...

郭云の... 郭云の...

... 郭云の...

柏秀序

子親... 郭云の...

... 郭云の...

... 郭云の...

少くも一郭云々

とらうとらぬは

おのれおつおつ

八月五日

前大納言

おのれおつおつ

源清氏

おのれおつおつ

源清氏

おのれおつおつ

おのれおつおつ

源清氏

おのれおつおつ

源清氏

おのれおつおつ

源清氏

おのれおつおつ

源清氏

おのれおつおつ

源清氏

病

あつた御まかせ

さきよりいふとふとれお存の朝の秋のさき
光の傳ふ入道前指家の子息方と傳す
萩 後二位家隆

守あす候の病もさき守光の孫の秋のさき
野上守光 前大僧正守光

涼草の里いじりし傳芽原とさきと病も新しき
由來感恩在秋とさきと

と師門院地也

かにさき一秋の夕れさきと地さきと秋とけり
み

おとくも

中務の宗を親王

さき一じりさき一さきの秋はさきとさきと秋と
な原の長

あつた御まかせとさきと秋とさきと秋と
文保三年百首并なまきり時

前中納言の相

さき一さきとさきとさきと秋とさきと秋と
秋の夕れとさきと 前原基任

さき一秋とさきとさきと秋とさきと秋と
前中納言定資家納言合し秋と秋と

とらふ事と

江戸書舞

花とてさきほくこほさうゆてけふゆふののち

又保百首并まけり時

前中細玄實仁

枯とせんぬしれうまは花落まひくはなよ入は

歌一と守

三善為連

風吹ふ存の少房ありてやうり移る月の影

前原基仁

かどくは薄く霜のあふくうさひありて思ふは

山階入乃前八大夫家十そこの夜中

前大細玄為氏

我より遠いあしきくはあお珠えいさき

甲一と

お海門流中表

きりくはあお珠えいさき

弘安百首并まけり時

静仁は親

かど花のついでいさき

文永十一年七月七日仙洞とて人いひ

ひそき并合しゆまら月

前大細玄為氏

いづれもあはれおかしき事なればとて此の御事

永福の院

よのつと人まゝにおぼし月と我方もほろひれ

皇太后さまを人信成

し申すにやいづれもあはれおかしき事なればとて

前々昔昔おぼし

いづれもあはれおかしき事なればとて此の御事

平約氏

前々昔昔おぼし

いづれもあはれおかしき事なればとて此の御事

平約氏

先世にありし神の御事とて此の御事

世にありし神の御事とて此の御事

前々昔昔おぼし

先世にありし神の御事とて此の御事

平約氏

先世にありし神の御事とて此の御事

元亨三年八月十八日

十三年の御事

前々昔昔おぼし

新嘉乃浦より二の折の事とてけいふまを甲一月と

折の事の中よ 常盤井入の常太政大臣

あしとさつとてまじき神代より折のよの月

度會綱棟

とらまひの事とてけいふ折の事とて

常僧正慈勝弁合しゆき河原中月

藤原説房

九まの事の人とて折の事とて折の事とて

折の事とて折の事とて折の事とて

折の事とて折の事とて折の事とて

折の事とて折の事とて折の事とて

思ひもす乃月よ折の事とて折の事とて

建武二年内裏子前守の折も折の事とて

折の事とて折の事とて折の事とて

折の事とて折の事とて折の事とて

今も折の事とて折の事とて折の事とて

折の事とて折の事とて折の事とて

折の事とて折の事とて折の事とて

折の事とて折の事とて折の事とて

菅原孝標女

さくら人よみとや山里此秋の秋少きと有明の月

兼中細云定資秋の秋方合よ山里月秋

今より事と増子内親王秋治部

月よもよもわた山の秋よの揚うまうと秋とあり

題一しす 法下年放

月の入流き小倉の山よけよひらうと秋けと秋よの

平氏村

くわげ秋乃と一秋葉と秋と秋と秋と秋と秋と秋と

菅原基夏

男鹿さく共田の秋の秋や秋と秋と秋と秋と秋と秋と

善く法師

い糸そよのつとつとつとつとつとつとつとつとつと

今別院を流

思いのつ富の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の

源氏経

秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の

家十首并よ菊霜

山階入道前左大臣

くく糸秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の秋の

言わたりてしる

前大納言経徳

朝に詔ありてゆひよき家ありて詔に詔ありて

九月ついでりの月お大僧正道昭の許す

まよのらとらぬおのりて詔けき物と

の授けりてゆきりぬ

前持僧正良家

言へしおのりて詔とて我神ありて

詔しらす

元妙法師

立田の時の雨乃とておのりて

前大納言俊光

ゆきも又とて詔とて詔の詔ありて

詔とて詔とて詔とて

小弁

とて詔とて詔とて詔とて詔とて

同九月詔の詔とて 源歌氏

詔とて詔とて詔とて詔とて詔とて

詔とて詔とて 前大納言

詔とて詔とて詔とて詔とて詔とて

鴨祐守

いめく時由よやもくくんうさ力せよ少たいり
澄さん法親王

初とれ又この冬もあつらひそくわの力をまよふれ

あまの国ゆつとせ給りり日大右の定ふま

らせ給うまの 朱符院御製

日のいりあふまよのうゆいあまのこれ山あふん

御製 大皇太后御文

白雲のたけりぬらうもろくゆんあふん太山の林葉まろ

えまうえひれ月おらぬ山あふんうま

まのこま 御製さくらりてあつらうまろくろく

いよ時由雲とりまよまろくろく

後宇多院御製

ういふしとゆやふあがたれまといあまのま

御一守 玉佛門院御製

時由少このあまのこれまろくろくまろく

法下院御製

我神の涙りりや林を月よあまのあ時由りん

有原秀長

横やま王ろくゆまろくろく山の初守とれ

平師親

つらつらと嵐のちを非骨あり紅葉の時あり

平貞宗

那波の夕暮も風さうれはさびしき草のむ

二品に親日兼光

好くそふかふまのれあてかえありわが歌の下

無山ありて山家冬朝と云ふとよきとありて

後宇多院御歌

我もめい人めとれを山甲よれさうまてわが朝ま

歌しらす

あふ人のさけははるかにしらすとよき歌の下の

は下長舞

板のうら歌の下まわりとたふとれぬうま

貞和二年百首あめされし時

正二位隆教

洲もむら後の朝も夜もりさびしうら歌のま

正中二年百首あめされし時

後醍醐天皇御歌

わが浦やあふれはるけ子多はつをうらなひ

文殊文物長玉津時社うらなひをたう

名はさめせりゆわらぬとよきとよき玉津時

娘よめり事とひく讀ゆき

紀津氏物語

尋ねおき浦らの浪をさしけわつたはるを

子さよとあり 前僧正道性

まをり流ひつぎても瀬子馬ゆりてきよ和を海に

入る二京親王を

おきれりわたり浦よと敷子を流りてんを

新後撰集よ入りて後お葉集よ

僧正道順

つこの浦よありとこれ浪をさし海よおの流りてす

流りてゆきりて子馬のうくとやてよあり

法印公順

心をたよめありてあきてあつてあつてあつて

又保百首よありて

二京法親王是助

こまをり浦の浪をさし世よ何とけを

歌一冊あり 法皇御製

水の上よ流のうきよ流りてあつてあつてあつて

式子内親王

ころかも風はりて浦の上よ流のうきよ流りてあつてあつてあつて

善源法師

建武二年丙寅子年十一月廿三日

藤原雅朝

藤原雅朝

藤原雅朝

甲一

前僧正

藤原雅朝

藤原雅朝

藤原雅朝

藤原雅朝

藤原基經

平泰時

藤原基經

也一

藤原基經

藤原基經

藤原基經

藤原基經

藤原基經

藤原基經

藤原基經

目録
述懐百首前の中一居竈

皇太后文筆後成

燈の火の影は我を照らして紙のついで下りて

おきりしと 寒道法師

わもろくぬせよとみく此のすてく鼠の煙とまらぬ

とて 宣政門院

年々みだくぬ物もまわり昔と今とあはれぬ

津守回助

と文よ年の言にん多しおれさうらつて目取され

よの暮しはは位氏久持しうをそとせとく

とらぬりよ 加久茂之世

たらしみの花の影のこぼれて秋をともす年の言

凱しらす 藤原孫清朝臣

け年のひかりをむと力お世に昔のえとて

お元内裏百首前まらり時歳を成

後照念院実白太政大臣

けけし文都しけりし言ふひえつりぬ年の言もり

同元年百首前しりきりつら

後宇多院御歌

けけし文都しけりし言ふひえつりぬ年の言もり

新千載和歌集卷第十七

雜方中

建武二年内裏より人い証とくらりて千そ
并はくうりりりり時秋大衆

前大納言の世

長き世のひらりゆりてまゝなるあはれのなと月と

前参議雅有

あまの宿と月のおいじんち平にのり神のあま

遍照寺より月をみくしあり

后三位頼政

あまの人のけよのまゝと月のおすめり廣はの池

権大納言の明

あまの月のおれねとまゝと月のおすめり廣はの池

了雲法師

あまの月のおれねとまゝと月のおすめり廣はの池

あまの月のおれねとまゝと月のおすめり廣はの池

あまの月のおれねとまゝと月のおすめり廣はの池

あまの月のおれねとまゝと月のおすめり廣はの池

后花園天皇前右大臣

あまのついでにいとすしめし新らん家く秋の草を月

元亨二年八月十八日辛未月辛未日今傳せられ

つらつそよ秋月とらつ事とらつをせけうけ

及守多院御製

顔の月や舟をきく成りけり世にひらめきけり

きよのうらす 前右三河守為政

あつらふさびにこの志ぬい月やじり此さるるけり

津守棟圓

月影はくぬ物といふれん人らちをけり

は下定悠

久野の月よむら此さるるんうそいけり面影は

人の花

月影はくぬ物といふれん人らちをけり

既中なる故る京野まきりて梅屋ん

竹まら時記とさうりてあうみゆきらり

深山月とふら所語ゆけ

拍子の序

と守のひらり深山の月影とさうりてあうみゆきらり

仁和二年久しく養老ゆきらりけり

つらつゆきけり秋月とみく

東光院合前堂白木板書

九代はみよこの竹ふまけしうらうさ御しうね青竹ゆり
述懐のふゆさうさうみゆきついでしう九代の
物し流えぬ事とさひてしうあり

前大僧正通昭

九代の君ははつてしうとみよさうさうさうさうさう

百首すまし時 前大僧正通昭

ゆりつて換りす平光の故さうさうさうさうさうさう
春日村はしう思くさうありしう前大僧正通昭

前大僧正通昭

絶しうつてしう物と我も世はさうさうさうさうさうさう

歌しうす とうしうしう

はるねいしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

か九百首すまし時

一条内大臣

おしうしうさの南川末まるとさうさうさうさうさうさう

述懐すのすしう 石左大臣

志はふゆしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

元徳三年四月一日内裏よりしうしうしうしうしう

てすつしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

後光の照院前実白たな

ふもあわ神代の契持まきとつて年々なほ

歌一守

前中納言実白

はつてそなたの流のまじふいふとあまの

お同白たな

流といふはくもさふたり水よあまの

実白流合前実白たな

と河のあまの流とまよも老乃流とあまの

百首奇なりし時速懐

前実白たな

おくれぬあまのあまの流保河のまよと

お好し心と

権人納言実白

あまの流あまの流のうまあまの

うま一人し

あまの流あまの流のみあまの

あまの流あまの流の清水とあまの

あまの流

流下実白

たつ流あまの流とあまの流あまの

あまの流あまの流のあまの

あまの流あまの流のあまの

おら月おうしおとそ外もやわたりなれいふ

つわうしきん

宗持法師

ゆえらやみ月の月とやまはらおの清きまはら

おしらす

前大僧正公院

風より横川の秋乃下陰よん乃あそふふし

建武二年内裏より首すよ何
法印や多禪

濁りさ横川の水れあひなけてもまはらと誰よ

述懐方とそよまはらうき

法皇御製

わさりの葉ゆりたるゆみののちをまてはほのひが
まげく事ゆりたるはうしゆき

建礼門院右京左

いさらふめあもつたあひおんはらじゆかま

信よ女のかまきんとすんあよつうけゆ

道余法師

うとくも我がいさつあつてあつてあつてあつて

年はされゆきりまの人の乃許へまらなる

りも教をとりまはゆきりけいよつうき入

ゆきり命

前大僧正公院

おけいふのきりうらやさんうつろ子の歌あはれ
亭子院ありわをせほつりきりは語約り

三条太夫長

うりやんせいといえりうらやさんうつろ子の歌あはれ
貞和二年百首弁めりわ時

正二位陸奥

えいふふらとけぬ世のうらやさんうつろ子の歌あはれ
百首弁めりわ時

兼大納言公蔭

前代の山坂乃松のまはらうらやさんうつろ子の歌あはれ

山家

権大納言実俊

水手乃松の嵐乃あはれまも枕はひく時の子さふ
おれんは海へをほて後人の琴をわかれ

はうまをほりり

後京極院

人まれを心とせり松風の勢をまきになもわき
世とのれをせけてり

宣政の院

とててりわかれわかれとよは海乃露のあはれわが

歌一守

朝仁法親王

秋みくも窓のられ行ありなれりわきをりて世は

貞和二年百首新なりし時

入る前を政大臣

うきよに心をむくも物成はるるに東院の定み

述懐弁らくしあり

源邦長物語

うきよの力よれも異作のたかりしきよの

土御門院小宰相

甲つては竹のたけあをけしむらうにけりし

入るる親王の國家よ百首なりし世傳

なりし竹を

法中淨弁

はらの竹の葉をよめりしありし

文保百首なりし 忠房親王

吳竹のうらぬのたけありし

百首なりしありし 時庭竹

二条法親王の風

おらるる竹の葉をよめりし

二条法親王の風

はらの竹の葉をよめりし

有原業信物語

はらの竹の葉をよめりし

父中臣祐親よりあるの節より極曲より
とゆへ又物別忠より節の方面侍より時お
といつせゆらん 中臣祐親
弟竹の二乃乃折つてもは母よりぬより
岳山殿より首弁の中より

前大細云ある

若し我よりんむまへつゝまおひりこのたを
康永四年冬のは等物院野たを
集傳文の
うのりおひよりり

入る親よりん答

あつたの
河より入るより
百首弁の中より
氏よりある
あつたの市人
あえ百首弁より

正二位降教

あつたの

述懐の奇きよあり

源和氏

そのぬりおろしはたれもよきなりしに
貞序の詞を後ゆかりの申す

僧正兼海

あまの浦の乃の奥のり後香ひよきなりしに

歌しらす

丹波知長卿長

かこりそのあしはたれわれと今文由りあきつる

入納云影実母國へのりあきと記す今

よきせりよきよ還少公

あまの浦の乃の奥のり後香ひよきなりしに

あまの浦の乃の奥のり後香ひよきなりしに

百そ奇しき時述懐

源和の奇きよあり

あまの浦の乃の奥のり後香ひよきなりしに

親貞二年冬親憲は師をたすけり

澄憲は中より業累代の徳と付

ゆきれりよあり

あまの浦の乃の奥のり後香ひよきなりしに

持世は別當に成り麻姑をたす

きり時入る内を長きうのく枝持しつるれい

あつてもゆかり 按察使実録

ヤキの光り取るとあつらふ親のゆかりはあつても

吾人深きゆかり還昇の上紙取つるす

てよもゆかり 中原師宗朝長

我々のうきとれをよきとれなら又立のちの雲の上人

貞和のうらふ月のあつてもあつても

ゆつそよよとつる

按察使實録

むつらゆかりのたのたまふまのちのあつてもあつても

あ

兼大細玄為定

あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

つさめのはたちえゆかりとつるれいよかん

ゆかり

大細言朝長

あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

兼中細玄宗經

位山まらぬ人のたそも今さう紙取つるす

大細玄のうきとれゆかりとつるれいよかん

あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

前大納言公藤

位山のりもやうそつねぬまの波とこん

貞和二年百首言なりし時

前大納言公定

いさむの波も位山くさつねのりも

のそみり事さうりつねのれい梅原信実

継りくさつねのり

前中納言公明

のりもいさむのりもいさむのりも

のれもいさむのりも

中製

香乳振のいさむももろい今一頃の片

文保百首言なりし時

六条内大臣

位山のりもいさむももろい今一頃の片

前中納言

前中納言基成

いさむのりもいさむももろい今一頃の片

惟宗忠宗

いさむのりもいさむももろい今一頃の片

前中納言

かき置たり侍りてしむる世のうらなはるる御ん
周嗣法師

弘安百首弁なりまら時
安嘉門院曰桑

海老宿人妻の心乃ら此山にまはれ
平宗宣御旨

世にまはるる今をいふに相あてかたに
二宗法親王宣旨

とつやかよはるる世の御んはたのむはるる
文保百首弁なりまら時

何れようじつをるる御んはたのむはるる
二条入道前太政大臣

述懐前よりいふ御ん
中宮女史宗一女

世にまはるる御んはたのむはるる
七人の御ん

世にまはるる御んはたのむはるる
前住僧正良宗

世にまはるる御んはたのむはるる
前住僧正良宗

世にまはるる御んはたのむはるる

平氏村

親言法師

ありふれたのうゝとせざるありたぬよつていふは

入道二系親王性助家おそくそのうへ

前大僧正性助

母のうゝとせざるありたぬよつていふは

性助ははあつていふは

法中実性

行末はあつていふは

親言法師

性大僧正親

うゝとせざるありたぬよつていふは

源直頼

親あぬ方中くはあつていふは

百首あつていふは

入道二系親王性守

別あつていふはあつていふは

文保百首あつていふは

後照念院園白を改た

行末あつていふは

不義而富且貴於我如浮雲とつる心を

惟宗光庭

かろくおぬれみしりや中やようくのやまはるるを

と指しよて奇よみゆり中よ海松と

前右三清徳為殿

浪のよよらんとたつらうらみのうらむくそくそく

歌一らす 法中仲殿

いへて難波のわたりぬきよんていふ一ゆのは

新右衛門首領なきら時に華

前原澄祐新右

おらう中難波の若れとのなもあけ入のよあやあらん

前大僧正慈法乃許らわき信てゆりよ

おらふよんてぬらりりし何ものよよとた

ゆりよんてゆりらとえりらるひ

とあやあまらのち海とわらふあえは

としとれとゆらぬ事ふ

前右を大納言朝

あやふりといふ難波のさくらひらうらとれ

歌不知 前原朝時

おらふやたと尋しよる鶴のめりらゆらゆら

建武二年内裏子育ありし記とありてよ
とてまけり時報動物とてしと紙

津守國夏

お奇浦やけのころのあつりりかたもまきやうとあり
寛文九年女侍入内屏風は鶴ありお

江二位家隆

わのころや入江のあはれおの鶴りり完よありんといん
世に伝ふ中よ 花園院御製

とくうそ世とていづらきうらのけきありらわあふ浦
承徳寺よ 江戸實見

わの川のほとりのあつりり年といわわらとてお奇浦人

貞和二年百首并ありて

後と案前田と伝

お奇浦のあつりりおの鶴ありとてお奇浦人

とて記しあり 後と案前田と伝

お奇浦のあつりりおの鶴ありとてお奇浦人

後と案前田と伝

お奇浦のあつりりおの鶴ありとてお奇浦人

元亨三年八月十二日又九月十日并御月

お奇浦のあつりりおの鶴ありとてお奇浦人

月...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

...
...
...

中原師重御信

あまのまゝののこしはなまのまゝとていふべし

本懐の事申す

信實の事

はてしなく我乃其のそとに由らん其のまゝに

有原信良

水蔓の蔓れさののゆとせよ強よとのこり

前奉儀の長書とていふべし

有原長備御信

とていふべし

頼ふ知 有中御云云

かきつら音の記とていふべし

新後撰集よりいふべし

有原氏

とていふべし

有原氏

年一わらねいふべし

有原氏

そのまゝの事いふべし

續後拾遺撰よりいふべし

よららぬうへにわらわりのうへに細玄師監
ついで巻をきせり

前入納玄為是

今らうわりの玉のふくまきとてはくはせんわりの

伊也

後醍醐院の巻

ついでわりのついでわりのついでわりのついでわりの

續千載集えういかりはゆきを牛あつち

て後醍醐院へなまらぬとてついでわりの

ついでわりの

達智門院

ついでわりのついでわりのついでわりのついでわりの

百首弁をうへに時海堂

嚴安門院一巻

ついでわりのついでわりのついでわりのついでわりの

續後撰集巻終人の平と傳りて前入納

玄為是もくは送りゆへに紙よりついで

ゆき

等持院贈る巻

ついでわりのついでわりのついでわりのついでわりの

わ

前入納玄為是

ついでわりのついでわりのついでわりのついでわりの

難のなをれ中より 後伏見院の巻

なまーらふ

我らくじかみのきれきれららわらわらわらわら

百三十一時 大納言殿

おき浦やうれなるといふての連れあひはかき

歌ーらす

はる浦并

いふせんは浦よのぶつりかきまきしほさふと

和方おのき人よはくめしうきられてはら

は依りらふ

惟宗光吉朝臣

おのれ我方の種はあそくをけしおきけり

迷懐をそとてらふ

お原雅歌

おき浦よのう汁のたあれじりのはなぬき

續千載よみぬらふはははははははははは

ゆきりは浦子島とらふとてらふ

ゆきり師

ののりやはつとらふはははははははははは

そしーらふ

村邊は師

おき浦よたゆまはははははははははは

はる浦并

とらふや者のはらはらふもかとうていあのみ

うきん

建保四年春藤原秀能入位射して東
寺舍利わも人るしそその堂よお拜守
一過一修くらわらまらわくつりきり

津守四経

わきまのつておてたりあう衣立白波の波とらわて

わ

如外法師

白波の波とらわらう波とらわけの波とらわらわ

歌一守

江戸果守

江戸海のつれ花は本まわ守まはわらわらわらわ

百首の巻一守一守述懐

藤内右兵衛

一守の花のつれ花は本まわ守まはわらわらわ

題一守

藤原興風

うけまらわらわらわらわらわらわらわらわらわ

正保二年百首の巻一守

大御玄師賢

あとの冊子の巻一守の巻一守の巻一守の巻一守

貞和百首の巻一守

たき流し巻一守

あとの冊子の巻一守の巻一守の巻一守の巻一守

述懐を申す たる申す義給

と云くよ世の人にしてはなほしてはなほのやと云く
百首をよみし時おきしは

世の人なりしものありしと云くありしは
連武二年人々をとりては首をとり
おとりしは述懐をよみしは

後醍醐院御製

かよふてはなほのやと云くありしは
百首をよみしは

御製

と云くよ世の人にしてはなほしてはなほのやと云く

述懐を申す たる申す義給

と云くよ世の人にしてはなほしてはなほのやと云く

御製

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

送るべき様へおらう見ゆ音好河を記し
水のあふれよおほいりてゆかりぬまよ

権中細玄通信

おらうのしるしを御一書おぼはらとくみく人のしるし
を明とすうたふしりしめむら年くくし
すそし

後醍醐院御製

おのしるしを御のしるしを御のしるしを御のしるし
御し

後一条天皇御製

人にしるしを御のしるしを御のしるしを御のしるし
んを人のしるしを御のしるしを御のしるし

しるしを御のしるしを御のしるしを御のしるし

人細玄朝光

常陸行を御のしるしを御のしるしを御のしるし
建武二年子首首よりせ始り

後醍醐院御製

九年を御のしるしを御のしるしを御のしるし
後醍醐院の御位乃しあまの御位
ふてゆきりよりみあせのしるしを御のしるし
下宿廳の御位
ふてゆきりよりみあせのしるしを御のしるし

あつたてのついでに
ふたつとついでに

少将日記

あつたてのついでに
ふたつとついでに

奇田伝

あつたてのついでに
ふたつとついでに
あつたてのついでに
ふたつとついでに
あつたてのついでに
ふたつとついでに

前原保徳

あつたてのついでに
ふたつとついでに
あつたてのついでに
ふたつとついでに

大納言の日記 源光行

あつたてのついでに
ふたつとついでに
あつたてのついでに
ふたつとついでに

前原宗泰

あつたてのついでに
ふたつとついでに
あつたてのついでに
ふたつとついでに

信成日記

あつたてのついでに
ふたつとついでに
あつたてのついでに
ふたつとついでに

前原宗泰

あつたてのついでに
ふたつとついでに
あつたてのついでに
ふたつとついでに

前原宗泰

神の及れうるに及びけの様おまきなりても推九歳が

御一らす 有原宗行

うじいそめお母年一よきと深のうれ神の御行なり

よみ人一らす

えじまへお母お母の御行なるを御のうき御力

是法に師

のりいもお母しうお母お母の御行なるを御力

等持院勝れた信力もあつて後叶らぬ

して後行なり 源信武

幸馬のこのお母のうぬくしうのこのお母の御行なり

御一らす 定昭法師

しうお母お母の御行なるを御のうき御力

建武三年八月廿八日大覚寺田禄あり

お母のうぬくしうのこのお母の御行なり

られたり徳業ありし。房舎もよみく

お母の御行なるを御のうき御力

しうお母お母の御行なるを御のうき御力

お母の御行なるを御のうき御力

持僧正道我

お母の御行なるを御のうき御力

百首前より一時の家

前田大信

はたけのこゝろをいふはまはたけのこゝろをいふはまはたけのこゝろをいふ

はたけのこゝろ

花園院御製

あつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむ

貞和百首より一時

中文とて人の事

あつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむ

あつた人もよむ

あつた人もよむ

あつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむ

あつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむ

あつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむ

あつた人もよむ

あつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむ

あつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむ

あつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむ

あつた人もよむ

あつた人もよむ

あつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむ

あつた人もよむ

あつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむあつた人もよむ

はな事よ

増子内親

歌よひもあはくもふたはれもそら世なるは現なり
懐述懐とりし事をも

雅成親

夢の世はよそにありてはあはれも心はつづいて

田家

恒雲は親

是の世はよそにありてはあはれも心はつづいて

久末元年百首

有原元任

夢の世はよそにありてはあはれも心はつづいて

述懐百首

有原元任

我こそ福来りかたはれわらわりの宿も人の心

歌

後人

善竹のうらた田井のうら世はあひあそむるゆえ

は眼は胤

夜はよそにありてはあはれも心はつづいて

善室上人

木はよそにありてはあはれも心はつづいて

前信正

川人のGammuram... 源為氏お片

ねる... 按察使資時

たて... 菅原長能

う... 元亨四年二月...

り... 前大細言実教

の... 中長結良

を... 楊義貞

山... 津守國夏

ね... 元亨二年八月...

み... 前大細言実教

十... 前中細言惟徳

月... 元亨二年八月...

久保百子并とてまうりり時

大儒正道順

申すにふらりておんまゝにまひけりおの

と備うんとあひまらけり守りり人

お道朝長女

りうらるるおのあつたまうりり人の

お一らす 乃賢法師

おのまも海世よおをけりてあてりておの

お元百首奇なまをり時山歌と

匠三位為信

あてりりおのあつたまうりり人の

お百首奇の事よ 花園院所製

とのりり人おのじまらりりつおの

雑地儀とらあ

是りのおのらあおの海を塵のらりり

お家とよなをけりり

有的の月をまられおのは秋のまひり

お一らす 乃賢法師

おのらりりおのあつたまうりり人の

お一書りりりりりりりりりりりり

賀茂基久

世にふりて世にりたりとそれとてしむるは

後山守前左衛門

秀晴法師

文保百有方なりきり時

後照念院園白の政

ひ末に我ありとむ物とむりてとるる

懐舊乃らとむせりきり

院師製

御とむるのむらとむりてとるる

永福門院

ありてはむらとむりてとるる

前大細玄実教

かたむらとむりてとるる

獨懐回より

前大細玄実教

ふらふらとくさくさしたる人よしのきりしる

野下りす

いふもてあはれむ心はまじくはらわらぬ神

友原秀行

神わらわの神えれ候所その妙よハ心一あり

法人不知

あはれむらむらあはれむらむらあはれむらむら

津守回石

いふもてあはれむ心はまじくはらわらぬ神

平宣時抄信

何れもあはれむ心はまじくはらわらぬ神

平政村抄信

思ふなりあはれむ心はまじくはらわらぬ神

は下長壽

まふりあはれむ心はまじくはらわらぬ神

前僧正宣伊

あはれむ心はまじくはらわらぬ神

藤原基祐

あはれむ心はまじくはらわらぬ神

鴨祐完

後の世とりくむわがやうくやぶらなれたのちるん

短弁

野武天中三書原のまよひ章一節

時の長分

よみ人しらす

んれく 藤のまらよ ばがたの たのじあひ
あまの うれよわつ ことさむ くりはらけ
こ海乃こ じまうわぶ あつらの 林とせく
ちたふの 衣よくあ ちげさし しのりこ
秋の東の めよのまね ありよひ

久末百首あまのけり時のたうらひ

大炊師の石巻

山乃色れ 松まつくぬ ちまねも くれ人うすホ
りしわ 花のまきえ ちれと 月乃林あ
あいらく うれよわ ちれとく 和方れ浦
うらあま ちまのくか ちのれ みるうら
ちまわく 母のまきえ ちまも ちまの地あ
ちいらく ちまのまき ちまのちく ちまのあま
ちいらく ちまのまき ちまのちく ちまのあま
ちいらく ちまのまき ちまのちく ちまのあま

うくたのらうまへんあはれい入のりたのりあはれい
のりたのりあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

東慶寺

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

津守園

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

入道二品親王

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

隆信

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

詠諧奇

真子院より梅のさるとよみかたむら

と中長頼基の信

ちりまていさういさよんまぬふれとぬもふ梅の節

物(ま)うりりりりりり梅の花の咲きりりりり

おきていさめり 西行法師

梅りえよまれ衣の袖ふれて花のさゆはくはらけ力外

花のさゆり中よ 正三位知家

はらぬも無慮の衣まきとて花のさゆはくはらけ

西行法師のさゆりしゆりきりよまむる野と

ゆきあそびよさひ別ら同行のゆりりりり

しりりりりりり例あふ事ゆりりりりりり

きりりりりりり 西行法師

山城乃山の人らとつたれぬあまのけいよあはれ

歌一りす 津守圓冬

西行法師のさゆりりりりりりりりりりりり

百首并りりりりりりりりりり

入道前太政大臣

うみいのみを今夜よりよもいりりりりりりりり

歌一りりりり 信実の信

山曾ふにりらめ落つともらする人なるに秋力

九月盡のらと 基後

病海さお親つ神とむつて行くく秋ささめつら

葦子院山時師あよりしきまのの

裏虫のうりらる紙紙もさつらうらねや

作しあひくれしあ

頼基物后

お柴の枝ふるねらこのじいあれあるあ

らあもてたあもさたからあ

うりまら とう人ー守

いふねさあらるあれをまのこもあてらね

あーら秋 おゆ後

あひー夕あのおまあそあやあああ

六指あしそあゆらああ中

前入他えあ家

あしあくのあゆれあをひあまうあはらう

後け指寺入るああをるあああ

から時の百首あすあ懐のあ

源仲徳

あしああ人ああああああああああ

新千載和歌集卷第十九

哀傷弁

中納言言

まゆ川うまの津の清なり
自そん浮雲を西着しゆぬしん

大江子

我方といふくさむら
朱雁渡りてをぬりての心候の山

中納言

うほらうおき人のひたけ

右近大納言
息つるけり

右近大將

ふと川津の

あし

あつせの

後述

清輔

妹背

後述

中つらつ神の御心の中はの御心は御心

まゝの御心 光後御下

みぶ入のつ折の御心は御心は御心

あふりつらつ時御心は御心は御心

入識の事とやゆておのつらつ御心

惟賢上人

ふらつ御心は御心は御心は御心

まの御心は御心は御心は御心

人の御心は御心は御心

惠法上人

かうつ御心は御心は御心は御心

氏上なる御心は御心は御心

惟賢上人の御心は御心は御心

惟中細云の御心

今つ御心は御心は御心は御心

東二条院の御心は御心は御心

惟賢上人の御心

惟賢上人の御心は御心は御心

おの御心は御心は御心は御心

惟賢上人

あつちのついでに物と名をうけつておぼしき人の
東の榮院にれをせ給てよのうらたは
うらたは人のあつち

紫式部

あつちのついでに物と名をうけつておぼしき人の
女師とせ給てよのうらたは

小野文右衛門

あつちのついでに物と名をうけつておぼしき人の
弘安元年三月前京景徳とよむておぼし
の良景徳とよむ寺とよむておぼし

法師高徳の花乃らりゆらとよむておぼし
首弁とよむておぼし

前大細玄為氏

あつちのついでに物と名をうけつておぼしき人の
白川のおんの氏子春文とよむておぼし
・給てゆらとよむておぼし乃日人とのらりけ
と女房とよむておぼし

入道正行氏

あつちのついでに物と名をうけつておぼしき人の
乃道乃良力とよむておぼし乃日人とのらりけ

養一のり時寄高蒲櫻田の事

う然上人

あふふその殺乃あやまきよまて長と神と
枝結縁經のつそよ同くふくそと返りたる

後中院前内大臣

いふふ海と神とけりてくたのあはれ神とつ
花山院前内大臣宰相中納言侍りたる
母の膝とてこゝろおゆりたる南殿の橋乃
感りりたるとわけてけりてすまそ

後深草院前内大臣

あふふん神とまきよまて長と神とつ

あふふふその勝徳よりまてあふふこのけり

付てつりたる花山院前内大臣

あふふ神とまきよまて長と神とつ

人のあふふゆりたる甲あふふあふふまきよ

あふふ乃前内大臣の侍りたるあふふの侍

あふふ神とまきよまて長と神とつ

あふふあふふの侍りたるあふふとまきよ

あふふあふふあふふ 後深草院前内大臣

あふふあふふあふふの侍りたるあふふとまきよ

痛みの心はゆるりし部とて

大宰権師為経

○一に書しやま井の町に九月一日に

紙一す 信に位為信

此の書は

五分の書は

此の書は

此の書は

此の書は

此の書は

かりける

此の書は

一人

此の書は

此の書は

此の書は

此の書は

此の書は

此の書は

九葉右

こころも清く若く後わたりてくはるるは
如えは師カドクありおこすて

母弟一徹子あり

うらの世はうじとてくはるる人かきうううえ
長二位家隆とありまると首弁の世は
のりともあり 前大納言の家

定則の人はうじとてくはるる人の業はわたりて
とありてくはるる人かきうううえ
あつて後坊なりなりの中へ

源順

母弟とありてくはるる人かきうううえ
そののりともあり 前大納言の家
子兼康朝とありてくはるる人かきうううえ

源有長朝臣

打ちてくはるる人の業はわたりてくはるる人かきうううえ
恒徳とありてくはるる人かきうううえ
くはるる人かきうううえ 遠子内親と

くはるる人かきうううえ 遠子内親と
くはるる人かきうううえ 遠子内親と
くはるる人かきうううえ 遠子内親と

を清國白虎の長

てふてふが一社の夕暮にさしあけし
又永九年のまは後醍醐院の御前僧を
ゆりりよあ元三年の社又龜山院より
せほけらうせらひらみゆき

前大僧正頼助

心よき一社のまはあまの社
月常懐旧よりよ

源行行

思ひあつ昔の社乃ちうらやまに
思ひあつ昔の社乃ちうらやまに

建治三年八月念堂上人の原
ておき一社

前大僧正頼助

まらうのまけい昔れうらやまの
僕ら門流をせほけらうせらひら
景眼始りけり秋月をわくはら
社流号のうらやまのまはあまの
みゆき
後醍醐院女御人
一条院のまはあまのまはあまの
まらうのまけい昔れうらやまの

いんげん さまお世侍

えんげんせいりやうの月夜うらやむらうらん
あまのいんげんお世侍

行僧正道哉

いんげんせいりやうの月夜うらやむらうらん
あまのいんげんお世侍

前大御とも世

いんげんせいりやうの月夜うらやむらうらん
あまのいんげんお世侍

は下定為

いんげんせいりやうの月夜うらやむらうらん
あまのいんげんお世侍

いんげんせいりやうの月夜うらやむらうらん
あまのいんげんお世侍

いんげんせいりやうの月夜うらやむらうらん
あまのいんげんお世侍

前大御とも世

いんげんせいりやうの月夜うらやむらうらん
あまのいんげんお世侍

源義氏お世

にやあひまゝにせしむるはうらやまの事なり

ほろり 諸川石大信

いふはあはれにせしむるはうらやまの事なり

二のよりの世にせしむるはうらやまの事なり

讀人しる

とせしむるはうらやまの事なり

あはれにせしむるはうらやまの事なり

賢人の世にせしむるはうらやまの事なり

高原長純

あはれにせしむるはうらやまの事なり

高階宗城抄信

賢人の世にせしむるはうらやまの事なり

先師先親上人の御事なり

良宣上人

わりの世にせしむるはうらやまの事なり

藤原院の御事なり

のうらやまの事なり

後二位家隆

花のよりの世にせしむるはうらやまの事なり

入道田舎のやうにして候りて
えりたりも陽福の院され候よ
歎一とてわらわらも
入道親王元譽
入道田舎

歎一とてわらわらも
歎一とてわらわらも
歎一とてわらわらも
歎一とてわらわらも

入道田舎

入道田舎のやうにして候りて

入道田舎のやうにして候りて

入道田舎

入道田舎のやうにして候りて
入道田舎のやうにして候りて
入道田舎のやうにして候りて
入道田舎のやうにして候りて
入道田舎のやうにして候りて

入道田舎

入道田舎のやうにして候りて
入道田舎のやうにして候りて
入道田舎のやうにして候りて
入道田舎のやうにして候りて

わたりてよめる 八細云接人

うらむ時よりなりぬれをてぬりたるをうけしむらん

ぬの力よりしてはる文のよりの娘人のと

ぬひしてはるまゝなり

美昭法師

冬枯のころをいれ葉をけしよ神の時ぬいふよりた

又のうひそくをいれぬけははぬ葉のらるを

らん

前右兼持為成

後よふ海の神の御のころのころのころのころのころ

文和三年十一月十日花園院のそまはら

いふに供養をいかりては山中より勅書

のたてしめ

はるしゆ製

あつたはるよきものころのころのころのころのころ

わ

入道親王豊ん養

あつたはる神の御のころのころのころのころのころ

あつたはるのころのころのころのころのころのころ

あつたはるのころのころのころのころのころのころ

あつたはるのころのころのころのころのころ

あつたはるのころのころのころのころのころ

あつたはるのころのころのころのころのころのころ

遊子内親まうしなせ給んしおきせ給
けり時 贈太皇太后文

春事のわらわれおの別よとてその山ゆりあせり
いづらむつとせ給うてぬれし

天曆四製

君のやあせりしとてその山とれしとて秋神と
母の力まうりせり中法の名を祀るはひら

澄えは親と

はらふとあせりしとて別ら行くま
はらふとあせりしとて別ら行くま

源頼時女

えにしとあせりしとて別ら行くま
はらふとあせりしとて別ら行くま

西苑門院これを行はるはよりゆり
はらふとあせりしとて別ら行くま

権僧正御守

あふとあせりしとて別ら行くま
はらふとあせりしとて別ら行くま

弘智法師

あふとあせりしとて別ら行くま
はらふとあせりしとて別ら行くま

法仁は親まゝに給ふ事は此の如し

法橋の御

と云ひてなほしをたすの心懐とせん力を御

と縁流入る前國由れたる所之れも時

とてゆかり事と云ひく事あり

僧救上人

と云へば此の如しなほしをたすの心懐とせん力を御

如れば師力由りて人々一歩程と云ふ事

なりし時 親中成茂

あましめくらぬ事此の如しなほしをたすの心懐とせん力を御

親部回長力まゝあて後の法はつらう事

親中成茂

りさ給のや此の如しなほしをたすの心懐とせん力を御

なり 親中成茂

思ふに及む所は此の如しなほしをたすの心懐とせん力を御

前中細玄基成力由りしは此の如しなほしをたすの心懐とせん力を御

親中細玄基成

着しにみらり事は此の如しなほしをたすの心懐とせん力を御

眼訓の院小傍り母力まゝあての事と云ふ事

此の如しなほしをたすの心懐とせん力を御

とめゆらつたそよ木像印のよきとよき

いづれせん 常盤井入道前太政官

信忠の時に木のつれといふうりかたあかん

御承知 年宣時御旨

うらむあまのうらむまらん今らんおのり

年終氏

うらむのうらむあまのうらむまらん

藤原素直母のうらむゆらつたうらむ

お音法師

あまのうらむあまのうらむあまのうらむ

お 藤原素直

今とけいじうらむあまのうらむあまのうらむ

けにけ親まくれけし候くさあまゆらつた

物とけいじうらむあまのうらむ

入道二お親王御旨

我が世よふん後のあまのうらむあまのうらむ

まつとらあまのうらむあまのうらむ

ゆらつたあまのうらむあまのうらむ

あまのうらむあまのうらむあまのうらむ

あまのうらむあまのうらむあまのうらむ

新千載和詩集卷第二十

慶賀奇

天福四年五月廿一日
大藏院一ふまよ御せ
好てらんこぞせ始りつ
つれも其方の人く
十つの方をもくしめ始
うせらよふあり

よみ人ーらす

華鶴のじまの海のさく
るい番のねも世とわら

歌ーらす

母之

おせぬと我とくま
よわらひのつよふら
りのおれは

正治二年百有方
なふらつら時

後京極持政前太政大臣

是甲のつわはは
なを流しじまの
鶴の美代

小野中太右大臣
い浴り七木よ衣
ふ

うくつうも
枇杷中太右大臣

おれ病のちお衣
まふらひのむせの
むさやわん

じまのつわは
はなを流しじまの
鶴の美代

指入細言長家

まらわ鶴の毛衣
まふらひのむせの
むさやわん

堀川院位よあり
まふらひの時
終理を又家保

くしめ人よあり
まふらひの時
終理を又家保

さうりくはくさく

月内侍

手合せのしるしをいへる鶴の毛をいへるしるしをいへる

ぬ

決理をいへる

手合せのしるしをいへるしるしをいへるしるしをいへる

建武二年内裏へしるしをいへるしるしをいへる

はくさくしるしをいへる

道徳は親王

手合せのしるしをいへるしるしをいへるしるしをいへる

建武二年内裏へしるしをいへるしるしをいへる

手合せのしるしをいへるしるしをいへるしるしをいへる

手合せのしるしをいへるしるしをいへるしるしをいへる

平重時朝太子をいへるしるしをいへる

はくさくしるしをいへる

手合せのしるしをいへるしるしをいへるしるしをいへる

平重時朝太子

手合せのしるしをいへるしるしをいへるしるしをいへる

建武二年正月十二日内裏へしるしをいへるしるしをいへる

しるしをいへるしるしをいへるしるしをいへる

等持院贈太子

百首やせしし所の報しふかき世のまをみか

此の久の親とあきて作未没多しと事

と決りきり 平貞時朝臣

美公もさつしし君しゆもいたるに堂は公の

文保百首やせし時

兼中納言実任

右のめし世のありと味よれかこはれはの是所

百首やせしし西庭行

按察使實任

九代は二代をわけて河津の地をみかひはちり

ふむ百首やせし

大納言通具

海より甲の捕のめもさるふと海くあら世の親小

園融院は時正月七月うまてしなまら年

東三条入る前務政長

然のくねのたれはくくは世の孫の目れくくん

若光園入る前実白たる名家うて定あよ白

統とらる事とよみゆら

源兼氏朝臣

ふむのいふはれはむらあふあふのいふはむら

あつたはよきとらひいふらよきとらひいふらよ

よ書付侍り 有東乃佐綱臣

あつたはよきとらひいふらよきとらひいふらよ

源道深

あつたはよきとらひいふらよきとらひいふらよ

建仁三年和弁ありて授阿ふ九千頭あり

あつたはよきとらひいふらよきとらひいふらよ

あつたはよきとらひいふらよきとらひいふらよ

あつたはよきとらひいふらよきとらひいふらよ

有東乃佐綱臣

あつたはよきとらひいふらよきとらひいふらよ

有東乃佐綱臣

有東乃佐綱臣

あつたはよきとらひいふらよきとらひいふらよ

康永三年後二月十二日仙洞にて松越子

あつたはよきとらひいふらよきとらひいふらよ

藤原為重御后

あつたはよきとらひいふらよきとらひいふらよ

巻之三 隆朝

末らばと君らみけとたふして事らばに君も美事也らん
建治四年一月ま交りて物春祝とてこれ
しと
後西園寺公家前左大臣
お丹波のさかひの御ふらひの御ふらひの御ふらひの御
えの御ふらひの御ふらひの御ふらひの御ふらひの御
まうらひの御ふらひの御ふらひの御ふらひの御

御書

あふねの御書とてさうさく我の事とてさうさくの
弘安八年二月一日自より九十一日御書

せつらひの御書とてさうさくの御書とてさうさくの御書
せり
伏見院御書

恨まらひの御書とてさうさくの御書とてさうさくの御書
正應二年内裏とて當見可春なとてさう
御書とてさうさくの御書とてさうさくの御書

當らひの御書とてさうさくの御書とてさうさくの御書
元弘三年立后御書とてさうさくの御書とてさう
行く御書
後定女院宰相御書

さうさくの御書とてさうさくの御書とてさうさくの御書
御書とてさうさくの御書とてさうさくの御書

向てしつてしつとらよ東海野の宮よ

葉つし西 前大納言の家

そとにたむあつて海をたのむの事なま

寄日記とらふ事と

金光院合前実白太政大臣

まの目みまのの御座てふのむけの事代り

光元二年二月十日襲して梅花賦文

とらふ事と備せしけらむ

金光院入道前右大臣

梅のむむらさきむひそや升のまを月

正中百首あまのけら時

後光の院合前実白太政大臣

とらふ事と備せしけらむ

後光の院合前実白太政大臣

とらふ事と備せしけらむ

長治二年同二月中文の院合

金光院合前

とらふ事と備せしけらむ

後醍醐院合前

院前実白太政大臣

此後より南殿よりうらうらとれてゆかりの
雲てゆかりあり 女御人可代

あしの雲井の橋今ゆきはついでにまやるとん
正徳二年三月多程月朝観行幸のされ
花源春色より事と海せられたるよ

為通御長

花のさかむかひのたのしみは海からかきまわす
前条はあま

ふりかへるものたれ花の色よきとれまはるはつ

歌一らあり

徳徳云

甲寅のうらむよるはつとゆい海のうらむはつとゆい海

正安三年七月田原のせり七首の一首

百松門院

はまのうらむ久このた川を海のうらむはつとゆい海

歌一らあり

有原高亮

あひのむらめり林の月よりと彩をみるはつとゆい海

寛治八年八月十五夜舟のつら月の新色のし

月とゆかりあり 富家入道前実白石政有

くさうらむゆんときん池のうらむつら月の新色のし

弘安三年八月十五夜舟のつら月と首首

講をせしむるは 前大細を為す

つらあらん子をせの秋の月と月とを結ぶ雲のよん

前田大信重菊子より大信の縁故より

つらあらん子をせの秋の月と月とを結ぶ雲のよん

前大細を為す

つらあらん子をせの秋の月と月とを結ぶ雲のよん

文治六年女師入内月次の屏風は田中よみ

家ありふ 中尾信之守文信成

建保二年八月十六日由良重隆の御成

建保二年八月十六日由良重隆の御成

秋紀 前中細を定家

山崎小をよみよとせしむるは

女院より菊をよみよとせしむるは

昭訓門院朝人細云

いくと世と娘のつらあらん子をせの秋の月と月とを結ぶ雲のよん

元弘三年三月月次屏風は菊の縁故

源正尹邦有親王

おきられし代のつらあらん子をせの秋の月と月とを結ぶ雲のよん

入道親王賞花入内月次

前大細を為す

二五法親王免勅

白河のたふぬとあひまきて可代らふらぬをり
連仁三年和介所りて頼朝より平治
とせむら時の屏風ふ

前中細玄定家

花山の松原よりわらぬをり
昇殿ゆりされてゆかりは客のあふふ人の
言法でゆかりぬすむはつらり

源兼胤物言

とつらりや舟の客とふかぬはゆりわたり

ゆりす

中原師光朝臣

あふらぬのつらぬぬり
君代いじりまうら年月とつらぬぬり

前備正慈勝

和元百首前はゆかり

前大細玄好世

とつらり年れ後のゆり
定法入道お国白た政は長の子
ゆかり

同院贈た政物言

とつらりゆりまうら子のねふり

弘安八年三月一日自字より中野野子に

せり時換りたり 兼六御云為氏

先の返り文よりいとつくりともおろし年々おろし

と元百首州令の中より

飛山院御製

ゆしとあはれのみまきくふれと河のふれあはれ

暦寛二年七月廿七日ね陰映地とつ

事と備せられたる時つくりし

兼六御云為氏

ねうえのたりのけと地ぬまうとと君の世れり

兼六御云為氏

ねよき花の後もつりけくせりつりつりつりつり

康保三年田原守命より十月廿二日大野

のきつふよ二番のこ草花をよみ

く成りせれいと大橋立のつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつり

うららぬねつりつりつりつりつりつり

兼六御云為氏

兼六御云為氏

あふべの君の浦にせれ石の若ぬおと成りつり

建武二年内裏子首より新地儀

授僧正良賢

約り我立松の山より子首を乃返り松より

常盤寺百首前より春日院

常盤寺入在常盤寺

子首より神祇の山に松より子首を乃返り松より

後西園寺入在常盤寺

常盤寺を宣政門院より一宗より

以て松より一宗より一宗より

松より一宗より一宗より

後京極院

代より約り一宗より一宗より

松より一宗より一宗より

り東より約り一宗より一宗より

子首より常盤寺より一宗より

子首を四人わらわら目の先より一宗より

伏見院位より一宗より一宗より

乃授り松より一宗より

常盤院入在常盤寺

君より約り一宗より一宗より

常盤百首より一宗より

我より君り七代は遠坂の園へ移りて居られたる

前大納言為世

あつて雲のふかき代はあふくと秋は紅葉をとり

元應元年後七月九日於今より神皇

苑の西あひの勅使よびしてゆかりをかく

とて御系はゆかり時朝餉よめされ

御衣とらきこれ道へ服陣よめく群

ゆかり時世のつつけゆかり

藤原綱尹御長

御衣のめいふかりり衣を指し世代と相ひのりか

正治二年百首奇は統

隆信朝長

可代よつておかしらるる我君とらふ新ひかりの都

統中飛茂七十賢しゆかりりゆえんたれ

おかしらゆかりりゆえんたれ

後醍醐院御製

本年乃りふのあめも昔よりはの秋とていふは

貞和百首ゆかり

花園院御製

昔もあめも一國の風とていふはゆかりりゆえん

入江二所親王の御

和田原より入江の御所より清和天皇の御代に

御不承

津守國を

海軍の御所より清和天皇の御代に

度會御棟

河東の地祇の御所より清和天皇の御代に

貞親政要の文と記すことありて

河東の御所より清和天皇の御代に

卜部御直

御所より清和天皇の御代に

正安四年六月後宇治院賀茂社に

御所より清和天皇の御代に

御所より清和天皇の御代に

御所より清和天皇の御代に

御所より清和天皇の御代に

御所より清和天皇の御代に

御所より清和天皇の御代に

御所より清和天皇の御代に

御所より清和天皇の御代に

御所より清和天皇の御代に

山内一太郎 前中納言直房

右振山也其藍子其乃其衣紋のり

文應元年大嘗會天皇其神子

又 仁二位行家

大納言山内一太郎

文保二年大嘗會悠紀方巳日の入

春新道江回新居

前大納言俊亮

山内一太郎

山内一太郎



